



こっくりさん

2

伊東廉

月明の椰子林をさ衛生軍曹と三中隊へ急いだ。敵機の夜間爆撃が遠雷のように聞こえていた。部隊で禁じられているこっくりさんという占いが今夜ひそかに三中隊のある分隊で行われるとS軍曹が聞いて来た。連日の猛爆撃と艦砲射撃で海岸線は焦土と化し戦死者は続出し各部隊は敵上陸に備えて地下壕構築に必死であった。兵たちは玉砕の地を知ら望郷の思いに駆られていった。その頃各部隊へどこからか神頼みのこっくりさんという占いが広がっていた。二本の小さな木を組みその上に占う者が手をのせる。こっくりさんが集り移ると木の下に書かれた文字の上を歩いて報告がある。敵の上陸友軍機の飛来生還できるか悲しいやりとりが行われるのであった。椰子の葉と竹の兵舎の中で椰子油の燈火を囲んで兵たちは集っていた。その前に見知らぬ上等兵が坐っていた。入ると「軍医殿が来た」と席をあげてくれた。その上等兵はこっくりさんを呼ぶが木が動かない。「戌年の者はいなりかこっくりさんはモと狐だから犬は大嫌いな」